

# エルピスくまもと 派遣活動記録

**日程** 2017年1月23日(月)～27日(金)

**報告者** 被災者支援センター エマオ石巻スタッフ 田尻 拓

## 1月23日(月)

熊本空港着。被害の大きかった西原村と益城町をまわる。解体されないままの家屋や解体後の空き地が目立つ。土砂崩れや道路修繕の為、全面通行止めの国道や県道が多く熊本市側から南阿蘇へは12月に開通したばかりの俵山トンネルを通るか阿蘇山の北を廻って入るしかないことが実感できる。

益城復興市場・屋台街では、15店舗が仮設で営業しているが、閑散としていた。

ボランティアが大勢来ていた時は繁盛していたことを伺った。地震から1年足らずで寂しい状態だが、新しい土地ではなかなか常連が付きにくいことや家屋の再建の為に家計が向かう中、震災特需で潤う関連の需要を取り込めなければ厳しい環境が続くことが見受けられた。

## 1月24日(火)

熊本城を見学。天守閣や城内は復旧工事中でまだ入れない。

西側と北側の石垣が大きく崩壊している姿や加藤神社入口の石垣の補強の厚みに言葉がでない。

天守閣の再建まで3年、崩壊した石垣などの整備には20年以上かかるかもと工事関係者(30代男性)の話をうかがう。余震が続いた中で当該工事関係者は南阿蘇山間部の避難所で勤めていたが、住民の方々の食料や物資が足りなかったことや、生活再建を目指すにも土地が崩壊して車の置き場さえなかったことを伺う。また仮設住宅の立地が車で1時間近くかかる場所があり、入居を断念せざるをえない方がいらっしまったことも伺う。関係が希薄だった集落が震災により結束したことや全国や世界中の方々から多くの励ましの声を頂いたことがよかったことだと仰っていた。

崩落した城壁の警備関係者(50代女性)は、震災により失職し今の仕事に就いたが、今年の記録的な暑さと連日の豪雨で疲れが溜まったとお話されていた。また、未だに余震やトラックで大きな振動や音がするとビクッとするとお話されていた。おひとり住まいで将来も不安だが、毎日を精いっぱい生きるしかないとの言葉が印象に残った。

お話を聞いた二人とも、私が仕事柄東北で被災者支援に関わっていることを明かさなくとも、東北の被災者は放射能で土地を追い出されたりしてもっと大変だったでしょう、私たちも震災に遭うまでは、どこか遠いところのことと感じていたが、ここで震災を経験したことで東北の方のことが少しでも実感としてわかることができた、もっと頑張らねばとそれぞれ締め括られ

ていた。全く別々にお話を聴いたのだが、東北の被災者との連帯感が生まれている反面、東北よりも被害が軽いのだから私はもっと頑張らねば、という気持ちが明るい動機付けのみに繋がることを願うばかりである。突然の失職や住まいを失ったことなどに変わりはないことから自らをそれで追い込むことにならないか心配が多少残る言葉であった。

午後 5 時、在日大韓基督教会熊本教会着。

エルピスクまもとセンター長、金聖考先生に出迎えられる。

今日までのセンターの活動の概要とスタッフ体制についてお話を伺った。

熊本教会に宿泊。

## 1月25日(水)

### ① 南小倉仮設団地(55世帯) ドリームカフェ

参加者午前 8 名、午後 3 名 (その他訪問者 1 名)

S 金聖考先生(センター長・熊本教会)、鈴木重宣先生(エルピススタッフ・直方教会)

V 日下部遣志先生(鹿児島地区川内教会)、日下部蒔恵さん(鹿児島地区川内教会)、田尻

### ② Aさん宅へコーヒー宅配。

S 金聖考先生(センター長・熊本教会) V 田尻

熊本教会から車で 30 分強の上益城郡御船町南小倉仮設団地の集会所でドリームカフェを開催した。優しい陽光が差す中、午前 10 時の「開店」前から早くも 2 名の女性がリラックスした様子で談笑し始め、すぐに参加人数が 4 名となった。スタッフがコーヒー豆をミルで挽き始めると、室内に漂い始めた。集会所は、当団地の管理を受託している YMCA の事務所にもなっており、参加者らは、顔なじみのスタッフらとリラックスしてお話されていた。1 時間弱でテーブルの廻りは参加者でいっぱいとなり、追加の椅子を出す。参加者から手作りのお漬物の差し入れをもらい、みんなでいただく。



お昼頃になるとそれぞれお昼の為に離散。

御船町恐竜博物館近くの食堂で昼食。恐竜の化石が発掘されることから恐竜の町としてのイメージを浸透させようとしている御船町は公園の遊具や町名の標識に恐竜をあしらっている。

午後は、昼食を終えた方々とゆっくり歓談。地元の料理のお話や町の特徴などについて話を聴く。木造の集会所では、暖房がいないほど暖かく、同じく木造の仮設住宅ではコタツがいないとの声も聞かれた。

集会所から撤収後、Aさん宅へコーヒーを宅配した。Aさん宅は一部損壊だったが、継続する余震でお子さんが自宅へ戻りたくないと泣きながら訴えていたが、仮設住宅への入居はかなわず、自宅へ戻ることに。

熊本教会に宿泊。

## 1月26日(木)

### ① ふれあい第二仮設団地(22世帯) ドリームカフェ

参加者午前8名、午後5名(その他社協など訪問者6名以上)

S1名 鈴木重宣先生(エルピススタッフ・直方教会)

V9名 坂田茂先生(鹿児島地区指宿教会)、松本敏之先生(鹿児島加治屋町教会)、赤星恭子さん(鹿児島加治屋町教会)、山口真弓さん(鹿児島加治屋町教会)、日下部蒔恵さん(鹿児島地区川内教会)、中山契生先生(佐賀地区唐津教会)、野中宏樹先生(バプテスト連盟 鳥栖キリスト教会)、大里恵美さん(バプテスト連盟 鳥栖キリスト教会)、田尻

### ② 西往還仮設団地(22世帯) および南小倉仮設団地(55世帯)

ドリームカフェ開催告知のポスティング

S 鈴木重宣先生 V 中山契生先生、日下部蒔恵さん、田尻

### ③ 御船町スポーツセンター事務室(YMCA受託先)へコーヒー宅配

S 鈴木重宣先生 V 日下部蒔恵さん、田尻

朝7時、外気温が2度前後の中、「焼きいも」の準備に鈴木重宣先生がとりかかる。あったかくて、歯の弱い方でも簡単に食べられるものとして「焼きいも」を振る舞うことに拘りをもって小石をバーナーとストーブで焼き、一斗缶にさつまいもと一緒に並べていく。1時間もすると焼きいもの香ばしい甘い香りが漂い始めた。

ホテルなどでのビュッフェで使う業務用コーヒーマシンを車に積み出発。30分程で御舟町のローソンへ。ここで、九州教区の他のボランティアと合流。15分程、ドリームカフェの準備の流れや仮設住宅での振る舞いなどを鈴木先生より伺う。

ふれあい第二仮設住宅は御船町の中心部に比較的近い公園に建てられており利便性は悪くない場所にあるが、プレハブ式仮設住宅であり、入居者の方は、寝ていると頭に冷気が吹き込んで夜寒くて起きてしまうと伺う。気温が1度近くになる中、東北の仮設住宅とさして変わらない環境があることが感じられた。

優しい陽光が集会所を差す中、会場の設営とコーヒーの準備に全員で入った。

集会所は木造で気密性も高く温かい。また、内装も仮設と感じられるようなことはなく、屋根まで吹き抜けの構造となっていることから開放的で天井の低いお住まいの部屋から集会所に

入っただけでも気分が軽くなられるのではないかと感じた。

到着後、少し待つと仮設の方が5名ほど入り、お互い知り合いのようですぐに賑やかな雰囲気となる。その後、参加者が増えつづけ、男女同数となった。参加者には、避難所でリーダー的存在を自主的に請け負っていた方や市内で普段働いている方もおられた。また、耳が遠いおばあちゃんに参加者の方が話を説明している姿や、参加者が入ってくる度に他の参加者が挨拶を交わす姿も見受けられ、コミュニティーがしっかりと形成されつつあることが感じられた。スタッフが一人の中、本住宅でのカフェが初参加となるボランティアばかりであったが、それぞれの持ち場と役割が明確に機能しているようであった。



昼食後、西往還仮設団地（22世帯）と前日にドリームカフェを開催した南小倉仮設団地（55世帯）へ次回ドリームカフェ開催の告知をポスティングした。洗濯物を干しておられる方が挨拶して下さり、また環境が綺麗に整備されており、全体的によい雰囲気で生活できているのが分かった。但し、西往還仮設団地とふれあい第二仮設団地に共通している問題点として、道路やまわりから全く視線や風雪、日射を遮るものがないことが挙げられる。ふれあい第二仮設では、夜中、寒くて起きてしまうと訴えておられた方などいることから、今後、入居期間が長期化することを考慮すると更なる住環境の整備が必要と感じた。

YMCAが運営を受託している御船町スポーツセンター事務室へコーヒーを宅配した。本スポーツセンターは地震後、避難所として機能しており入口ロビーにまでマットが敷き詰められていたというが、未だに階段アプローチに亀裂が入り段差も残っていた。

コーヒーは6名のスタッフに大歓迎されたが、震災までと地震後のYMCAのよき働きと避難所でのエルピスの地道な活動があったからこそ、町内の方の理解が得られ、仮設住宅でのエルピスの活動がスムーズに実施できていることを感じた。

午後は、お昼に一旦出られた男性参加者が終了間際に戻ってこられスタッフと一人で午前中の会話のつづきをするなど、スタッフと参加者の信頼関係が強いことが見受けられた。

16時過ぎ撤収。町内の地域ささえあいセンターにて、当日のカフェの報告書を提出し次週の予定を確認した。

熊本教会に宿泊。

## 1月27日（金） 阿蘇山周辺フィールドスタディー

S 鈴木重宣先生（エルピススタッフ・直方教会）

V 日下部蒔恵さん（川内教会）、田尻

土砂崩れや路面補修の工事の為、熊本市方面からアクセスが悪い南阿蘇村を視察。  
熊本市内から1時間ほどで南阿蘇に入る。ルートは、12月に開通したばかりの俵山トンネル。  
それまではさらに大きく南廻りで迂回せねばならなかった。

南阿蘇は山間の斜面に農家の集落が点在する村だが、人口の多い町や大きい商業施設から比較的遠く、支援が届きにくい地域だと感じられた。また、仮設団地も建設されているが、場所がまだネット上の地図に反映されていないなど、さらに民間の支援の対象から漏れやすい状況。

車中、鈴木先生から、仮設住宅での社協の取組みや方針などについてお話を伺った。石巻や仙台とは違う環境・関係性の中、エルピスが活動していることを感じた。

熊本教会に宿泊。

## 所感

- ① ドリームカフェでの丁寧な活動を通して避難所から築かれた被災者との信頼関係がお互いの大きな財産となっていることが何度も胸に響いた。地元の方への対応に見受けられるスタッフの丁寧な姿勢とボランティア受け入れにかかるスタッフの心遣いを間近でみることができ、活動が地域と教区にさらに根差していくことを感じた。
- ② 26日は九州教区の各地から教会ボランティアが車で片道3時間以上かかるなどしても朝9時から参加するなど教区の強いコミットメントが感じられたが、定期的に通うボランティアの負担が懸念される。高速代などの財政的な支援だけでなく、熊本市近隣からのボランティア参加を促していくことが長期的な課題として挙げられる。
- ③ 被災者の日々の平安が一日も早く取り戻されるよう祈りつづきたい。